

伊勢湾アサリ漁業環境基盤整備事業

辻 将治・羽生和弘・勝田孝司

目的

「伊勢湾アサリ復活プロジェクト」で伊勢湾内のアサリ資源増大に向けた造成干潟、効率的な稚貝移植手法の確立に取り組んでいる。アサリに悪影響を及ぼすカイヤドリウミグモが、干潟造成に用いる砂の採取場所の松阪地区で確認されたことから、松阪地区と造成先の楠地区のウミグモ生息状況を確認する。また、移植用アサリ稚貝を採取する香良洲、今一色地区の稚貝発生状況を調査するとともに、ウミグモの生息状況を把握する。

方法

1 「伊勢湾アサリ復活プロジェクト推進事業」における楠地区の干潟造成

平成31年2月に、楠地区の干潟造成に使用した砂を採取した松阪市榑田川河口でカイヤドリウミグモがアサリに寄生していることが確認され、干潟造成に使用した砂とともにカイヤドリウミグモあるいはカイヤドリウミグモが寄生する二枚貝が干潟に持ち込まれた可能性が考えられた。今後の干潟造成事業の参考とするため、楠地区の造成干潟および干潟造成に用いる土砂の採取先である榑田川地区で二枚貝へのウミグモの寄生状況を調査した。

カイヤドリウミグモの調査は、楠地区で4月8日、5月20日、6月19日、7月16日、榑田川地区で2月14日に行った。

2 「伊勢湾アサリ復活プロジェクト推進事業」におけるアサリの稚貝移植

今年度のアサリ稚貝の移植放流は、カイヤドリウミグモの寄生で中断されたが、稚貝移植の再開に備えて、香良洲、今一色地区の稚貝発生状況を調査するとともに、ウミグモの寄生状況を把握した。

香良洲地区（雲出川河口域（新川、古川））では、アサリ稚貝の発生調査を5月22日と6月4日に行い、今一色地区（宮川河口域（9、10、11共内））では、7月23日に採泥器を用いてアサリ稚貝の発生調査と底質調査を行った。

結果および考察

1 「伊勢湾アサリ復活プロジェクト推進事業」における楠地区の干潟造成

楠地区では、調査を重ねるたびに採取可能な二枚貝量が減少し、7月はアサリが全く採取できなかったが、アサリ、バカガイ、ハマグリを対象に調査を行った。7月までに採取した二枚貝（アサリ、バカガイ、ハマグリ）では、カイヤドリウミグモは確認されなかった。

また、2月の榑田川の調査でもカイヤドリウミグモは確認されなかった。

2 「伊勢湾アサリ復活プロジェクト推進事業」におけるアサリの稚貝移植

香良洲地区の6月4日の調査では、新川で平均殻長7.8mmの稚貝を確認し、稚貝の資源量は約175tと推定した。古川では平均殻長7.9mmの稚貝を確認し、稚貝の資源量は約12tと推定した。アサリの殻長は、昨年同時期より約3mm小さかったが例年並みであり、推定資源量は昨年より新川で約70t多く、古川では約28t少なかった。なお、6月20日開催の三重県あさり協議会において、今年度の移植放流は見合わせが決まった。

今一色地区の7月23日の調査では、アサリ稚貝は、五十鈴川内で最大1,970個体/m²の密度で確認されたが、例年移植放流用のアサリ稚貝を採取する大湊周辺の密度が500個体/m²程度であり、例年の数千～1万個体/m²と比較して非常に少ない状況であった。

香良洲地区と今一色地区で、アサリを対象にカイヤドリウミグモの調査を行った。カイヤドリウミグモの寄生率は、香良洲地区では5月22日に30.4%、10月4日は0%、1月21日は0%であり、6月4日はサンプル採取不可であった。今一色地区では、4月19日に26.7%、10月17日に0%、11月25日に5.0%、12月24日に12.5%であり、7月23日はサンプル採取不可であった。

3 「伊勢湾アサリ復活プロジェクト推進事業」の今後

平成28年度から開始した「伊勢湾アサリ復活プロジェクト推進事業」では、アサリ稚貝を有効活用したアサリの資源復活に取り組み、本事業で得られた知見をもとに、三重県モデルとしてアサリ稚貝の有効活用技術を構築し、その技術を平成31年度に「アサリ稚貝移植放流マニュアル」としてとりまとめた。このマニュアルを活用したアサリ稚貝移植放流が伊勢湾内の各漁場で行われることにより、アサリ資源の復活に取り組む方針であったが、平成31年2月にアサリへのカイヤドリウミグモの寄生が確

認されたことにより、漁業者が主体となったアサリ稚貝の移植放流が中断されている。次年度も本年度と同様に、県内の楠，松阪，香良洲，今一色でカイヤドリウミグモの調査を実施する予定であるが，アサリ稚貝の移植放流は未定である。